

市民と市政をつないで41年

広報しろいし

五百号史

広報しろいし
500号記念

昭和三十四年九月に「白石市政だより」が広報しろいしの前身(第一号)を創刊以来、「広報しろいし」は今年で500号を迎えました。
今月は500号を記念して、「広報しろいし」四十一年の歴史を振り返ってみました。



五百号までのあゆみ

- 1号(昭和34年9月15日発行)「白石市政だより」として創刊、B4版1色刷りで毎月15日発行
- 13号(昭和35年9月)からB5版に変更
- 57号(昭和39年4月)から紙名を「広報しろいし」に変更
- 90号(昭和42年1月)から発行日を1日に変更
- 176号(昭和49年4月)から月2回発行(1日発行「本紙」と15日発行「お知らせ版」)
- 225号(昭和53年5月)から月1回1日発行に変更(お知らせ版終了)
- 250号(昭和55年5月)から2色刷り開始
- 346号(昭和63年5月)からA4版に変更
- 486号(平成12年1月)から表紙・裏表紙を毎号4色刷り(カラー)に変更
- 500号(平成13年3月)を発行

「市民が主役」の紙面づくりへ

第一回全日本こけしコンクールが開かれた記念すべき年、昭和三十四年に「白石市政だより」として第一号が発行され、現在の「広報しろいし」の歴史が始まりました。一号からしばらくの間、内容はお知らせが主なものでした。五十七号から紙名を「広報しろいし」に変更して、再スタートを切りました。発行を重ねることに写真が多くなり、また、ページ数も増えて、より多くの情報が提供できるようになりました。二百五十号あたりから、市民を主役にした紙面づくりを目指し、時の人を紹介するコーナーや、市民の皆さんからの投稿、まちの話題などが掲載されるようになりました。

また、広報紙の顔となる「表紙」の写真は百六十五号から毎号登場。初めは、史跡を訪ねてといった風景が中心となっていました。A4版になると日本の伝統的な「技」を守っている方々を取り上げた「技に生きる」や、農業に携わっている方々を紹介した「農業まつしぐら」など、市民が表紙を飾るようになりました。ここ数年は、カラーになってより見やすくなり、市民の表情の豊かさなども伝えていきます。

現在、広報しろいしは、毎月一万二千七百部を発行し、自治会を通じて各家庭へ配布されているほか、購読を希望する市内外の企業や個人へも郵送されています。

いつから始まったの?

継続中のコーナー 長寿番付

()は掲載開始号、()は現行名になった号

- 1位: まちかどズーム・イン(177号)
開始時は「まちの話題」(372号から現行名)
- 2位: 図書館ひろば(202号)
開始時は「みんなの図書館」(403号)
- 3位: 市民文芸(225号)
- 4位: ヘルシークッキング(225号)
開始時は「味自慢」(345号)
- 5位: 消費生活モニター(234号)
- 6位: ホットな白石の人(246号)
開始時は「市民登場」(430号)
- 7位: わが家のアイドル(246号)
- 8位: ちびっこ美術館(262号)
開始時は「わたしのケツサク」(393号)
- 9位: マイサークル(381号)
- 10位: 川井市長のせせらぎトーク(394号)
- 11位: 暮らしのヒント(405号)
- 12位: 健康一口メモ(418号)
- 13位: 虫歯のない子(453号)
- 14位: カロラインの国際コーナー(483号)
- 15位: 白石の古文書(490号)



表紙に「技に生きる」人をシリーズで紹介。379号(平成3年2月)は、平成9年10月に亡くなられた、県無形文化財の遠藤忠雄さんでした。



300号(昭和59年7月・20ページ)表紙は白石一小の児童による300号を祝う人文字です。



市制施行30年記念特集号(昭和58年11月30日発行)登別市と姉妹都市提携をしたのもこの年でした。



100号(昭和42年11月・4ページ)お年玉つき年賀はがき発売の記事には、はがきは一枚7円、一等はトランジスタテレビとありました。



176号(昭和49年4月・6ページ)と、お知らせ版1号(同月・4ページ)お知らせ版の題字は、市内の小学生が書いたものを転載していました。



20世紀最後の広報となった497号(平成12年12月)



白石のシンボル、お城が表紙になった462号(平成10年1月)



400号(平成4年11月・26ページ)特集は400号を記念した年表で振り返る「白石の歴史」でした。



200号(昭和51年4月・8ページ)下水道工事着工が主な記事でした。